

月照寺

月照寺は、10代にわたって松江を統治した松平家の菩提寺です。元々この場所には古い禅宗の寺がありましたが、松平氏の庇護の下で浄土宗の寺になりました。ここには松平家の松江藩主9人の墓があり、それぞれの墓は石段丘の上にある大きな敷地内にあり、石灯籠に囲まれた豪華な木の門があります。

墓標自体は、丸い石の屋根の上に球体や円柱のような要素を積み重ねて構成された堂々とした仏教の石碑です。これらは石の台座の上に乗せられ、周囲には高い石の手すりが作られています。

宗衍の石亀

月照寺で最大の墓は、将軍徳川家康（1543-1616）の孫で、1638年に松江を治めた初代松平氏の松平直政（1601-1666）のもので、彼の墓の周囲は、2面が蓮の葉型の堀で囲まれ、そこには低い石橋が架けられています。ここの墓の多くには、そこに埋葬された藩主にちなんだ独特な特徴があります。最も有名なのは、6代藩主宗衍（1729-1782）の墓の横に置かれた巨大な石の亀です。その背中には巨大な石板が乗せられ、高さは5メートルにも及びます。19世紀末の作家小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、幽霊談をおさめた有名な『怪談』の中で、この亀を取り上げており、この亀の頭を優しく叩くと長寿が約束されると言われているとしました。しかし八雲は、暗くなってから見るととても不気味に感じたようです。

茶筌の葬儀

不昧の名で知られる茶人・松平治郷（1751-1818）の墓には、木製の門の、通常ならば神話上の動物の彫刻を施すべきところに、美しいブドウの彫刻が施されています。この彫刻は繊細かつ豊かで、深いレリーフ彫りと透し彫りが組み合わされています。ブドウというレリーフは異例であり、彫刻の様式はヨーロッパに典型的に見られるものです。月照寺では、その他の形でも不昧の記憶を今に伝えています。不昧は寺の正面の門近くの井戸から頻繁に茶会用の水を採取しており、今でもこの井戸は同じ目的で使われています。彼の墓には、寿命が限られている茶筌に捧げられた碑があり、毎年4月になると、不昧の命日に使えなくなった茶筌のための「葬儀」が行われます。

月照寺は、1月から7月にかけて様々な種類の花が咲くことで有名で、特に3万ものアジサイの花が咲く6月には多くの参拝者が訪れます。大きな旧本堂は基礎しか残っていませんが、いくつか現存している建物もあり、その中には参拝者が立ち入ることができる茶室もあります。